

クワズイモ

概要

和名（科名）	クワズイモ（サトイモ科）
別名	アロカシア
英名	Alocasia
特徴	サトイモ科の多年生草本で、高さは1m以上になる。根茎は棒状で太く、匍匐し、しばしば地表に出る。根茎には、輪状に残る葉痕が目立つ。葉柄は、長さ60~120cmで太く、葉身は盾形で、基部は心形、先端は短くとがる。花期は、5~8月。果実はトウモロコシのような形状で、赤色に熟す。全体に鮮緑色で、葉の姿はサトイモに非常によく似る。 根茎を食べて中毒を起こした例が報告されているほか、汁液が皮膚につくと、かぶれることがあるので注意が必要である。
有毒成分	シュウ酸カルシウム
分布	四国南部、九州南部～琉球、中国南部、台湾、インドシナ、インドの暖帯から亜熱帯。 クワズイモ属の植物は、観葉植物として鉢植え等で栽培される。

毒性

部位	全草
毒性	中
食用の可否	根茎はデンプンを含み、充分に晒して食べることができるが、処理が不十分だと中毒を起こす可能性がある。

(写真)



クワズイモ

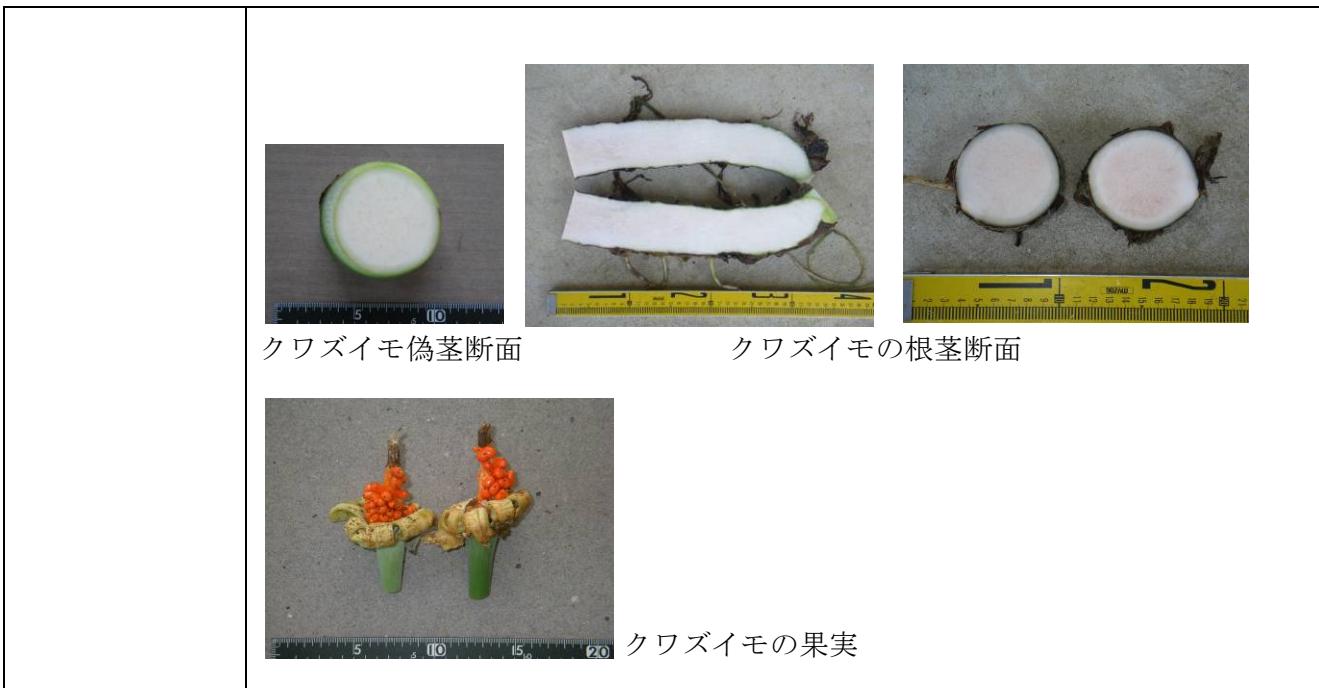


クワズイモの根茎

詳細

1 特徴

一般名	クワズイモ
英名	Chinese taro
学名	<i>Alocasia odora</i> (Lodd.) Spach
分類	サトイモ目 Arales、サトイモ科 Araceae、クワズイモ属 <i>Alocasia</i> (APG 分類体系ではオモダカ目、サトイモ科、クワズイモ属)
生育地	四国南部、九州南部～琉球、中国(南部、台湾)、インドシナ、インドの暖帯から亜熱帯に分布。低地の常緑樹林下にはえる。 クワズイモ属の植物は、しばしば観葉植物として鉢植えで栽培される。
形態	全体の高さが 1 m 以上になる多年草。根茎は棒状で太く、横伏し、しばしば地表に出る。根茎には葉痕が輪状に残る。葉は鮮黄色で、茎の先端に束生し、葉柄は太く、長さは 60～120cm。葉身は楯形につき、広卵状の矢じり形で鋭頭、基部は心形。側脈は 10～12 対で、葉縁は波状になる。 花期は 5～8 月。花茎は長さ 15～25cm。仏炎苞は黄緑色でやや白色を帶び、筒部は長さ 4-8cm、舷部は約 10cm。果実は球形の液果で赤色に熟す。
	 <p>クワズイモ</p>
	 <p>サトイモ（食用）</p>
	 <p>クワズイモの葉</p>
	 <p>クワズイモの根茎</p>



2 毒性成分情報

毒性成分	シュウ酸カルシウム (calcium oxalate)
食中毒の型	消化器系の中毒、接触刺激性の中毒
中毒症状	恶心、嘔吐、下痢、麻痺、皮膚炎など
発病時期	摂食後すぐに発症
発生事例	<p>(症例 1) 2000 年 6 月 30 日に鹿児島県の宿泊施設で、刺身のつま及び味噌汁の具として使用されたクワズイモの茎を食べた客 4 名中 4 名が中毒症状を訴えた。</p> <p>(症例 2) 2008 年 9 月 21 日 福岡県宗像市で開かれたイベントで、販売された芋類に観葉植物のクワズイモの茎が混入し、買って食べた人に食中毒とみられる症状が出た。イベントで販売された芋類約 60 束の中に、誤って 10~20 束のクワズイモが紛れ込んでいたことが原因。</p> <p>(症例 3) 2008 年 11 月 11 日に延岡市内のスーパーから、はすがら (ずいき) (サトイモの茎) を購入し、同日、日向市内で酢の物にして摂食した 2 名中 2 名が、口腔内のしびれ (イガイガ痛み) の症状を呈し、病院で加療した。購入した「はすがら」に「クワズイモ」が混入したことを原因とする食中毒と判断した。クワズイモが自生している場所にサトイモを植栽しており、収穫時にクワズイモが混入したことが原因。</p>
予防対策	<p>クワズイモは不溶性のシュウ酸カルシウムを含んでいて、この針状結晶による刺激により、中毒症状を発症すると考えられている。</p> <p>口に含んだ時点で、強い刺激を感じるため、すぐに吐き出し、口を洗浄する。また、飲食以外にも汁に触れることで皮膚炎を起こすことがあるため、観賞用として扱うときにも、ゴム手袋等を使用し、汁が直接肌に触れないようにする。</p>
毒性成分の分析法	<p>光学顕微鏡による不溶性シュウ酸カルシウムの観察 HPLC によるシュウ酸の分析 (「長崎県衛生公害研究所報 46 (2000)」より)</p>

3 その他の参考になる情報

諸外国での状況	肉質の茎や根茎から採れるデンブンは、十分に晒して食用とする地域もあるが、処理が不十分だと中毒する。
間違えやすい植物	地上部（葉、葉柄）の様子が、サトイモと非常によく似ている。